

一生の記憶

柏崎市立高柳中学校

一年

永井

麻優子

あの地震は、一生私の記憶に残るだろう。

お父さん。

私は叫べた。私はただ、何かにつかまっ

立っているだけで精一杯だった。何か落ち

て割れる音、家の柱がきしむ音が聞こえる。

私は、不安と恐怖で頭がいっぱいになった。

「ドンドン」

誰かが階段を降りてくる音が聞こえた。それ

は、父だった。私は、父に抱きついた。やっと

と落ちつけたと思った時、辺りが一瞬にして

暗くなり何も見えなくなった。その時、余震

が来た。その場にしゃがみ、ゆれが止まるの

をまわった。ゆれが止まると同時に、父は私の

腕からはなれ、家を出て行ってしまった。父

を止めたくても、声が出さず止めることはで

まなかつた。また、一人ぼっちになった。しま

た。

「ガラッ」

戸が開く音がすると同時に、母が叫んだ。
「大丈夫？早く家から出よう。」
その一言で家族全員が外に出た。またゆれ始
めた。外から見る家は、大きく横にゆれて、
まるで生きているように感じた。近所の家も、
同じようにゆれていった。ゆれが止まると、近
所の人が集まり、布団とござはんを家から持
てきてくれた。まだ温かいござはんと、一口ぐ
らいのコロツケを食った。ふと、空を見上げ
ると、飛行機が飛んでいた。
「あの飛行機に乗ってる人は知らないんだよ
ね。この地震のこと。」
姉がボソッとつぶやいた。
「そうだよね。知らないんだよね。」
と私は答えた。その時、誰かの足音が聞こえ
てきた。消防団の人だった。
「大丈夫ですか。危険なので一車に避難して
下さい。」
私はうなずいた。そして、私達は一斉に車
へ移動した。

私は、寝おれずにはいた。寝ようと思った時、地震がきて目が覚めてしまった。その繰り返しは、ハッとした。姉は横で、気持ちよくて寝てハッ。それか、今の私には、ううやまし、いことだ。そんな私を見つめた母が、早く寝なさい。心配しなくていいから。と優しく言ってくれた。その一言で、私は心界に入りこんだ。

こうして、長い長い数時間が終わった。